

伊勢湾台風から 50 年

関東学院大学教授 宮村 忠

「伊勢湾台風から 50 年」。さまざまな催しが行われ、あらためて伊勢湾台風の記憶を呼びおこし、その継承が計られた。そんな中、とある会議で、「東京の人」に警鐘を發する意見を聞いた。その内容はこうである。東海地方では伊勢湾台風について、テレビ・新聞などで大々的に報じられたが、関東地方でのとりあげかたがいかに貧弱である。したがって、伊勢湾台風がもたらせた災害の認識が稀薄になっているだろう。こまったことだ。この警鐘はもつともで、「喉元すざれば熱さ忘れる」の情景なのだろう。そんな「熱さ忘れた」頃の 10 月初旬に、伊勢湾台風と同じ程度の大型台風の襲来があり、台風情報に強い関心が寄せられた。

伊勢湾台風と同程度の大型台風の再来ということ、大阪や東京の人と、名古屋の人とは、同じ関心を寄せたものの、やや異ったレベルだったのではないかと推測した。

なにしろ、関東地方では、伊勢湾台風の経験をもっていない。「喉元」がないのであるから「熱さを忘れる」ことができない。むしろ、東京周辺では、伊勢湾台風の前年に襲来した狩野川台風、それより 10 年ほど前のカスリン台風が記憶に継がっている。それだからこそ、1 昨年に「カスリン台風 60 年」、

10 年前に「50 年」の催しが盛大に挙行され、昨年の狩野川台風の記憶を伝える「50 年」の催しも同様であった。

一方、大阪では、なんといっても大正 9 年の室戸台風、昭和 25 年のジェーン台風、そして昭和 36 年の第 2 室戸台風の三大台風の経験がある。大阪の防災都市・水彩都市形成の契機となった台風である。

すでに「80 年」を記憶し、「60 年」、「50 年」が次々と控えている。

一方、過去の災害記憶が薄れかけているところもあろう。例えば、京都の鴨川もそんな傾向に映る。市街地の中心部を流れる急流河川鴨川は、昭和 10 年の洪水氾濫で激しく中心街が襲われた。浸水戸数は 2 万戸を越え、ほとんどの市街地の橋が流失してしまった。その後の改修は 12 年を要して、昭和 22 年にやっと完成した。わずか 72 年前の京都市街地の大水害は、敢えて言えば、歴史的事象になってしまい、私感にすぎないかもしれないが、日常の中で記憶を継承させる方向には乏しい。

また、特異な経歴で水害記憶に乏しい都市として札幌をあげることができよう。

中心市街地を 1/200 ほどの勾配で流れる豊平川に、大正 2 年、大洪水が発生した。

この洪水が、豊平川の既往最大で、治水計画の対象とされている。その時、扇状地扇頂部付近から左右岸の扇面に氾濫したが、左岸では破堤によって氾濫流は札幌中心街を襲った。

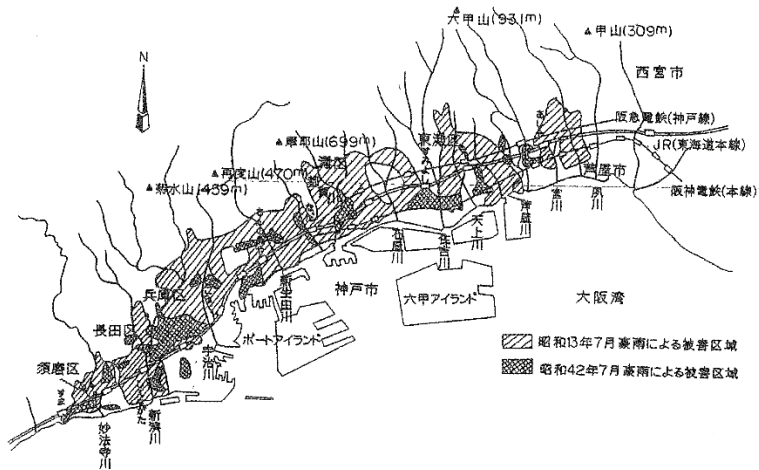
扇状地肩頂部は、治水・利水の要の地であるため、ここでの出来事はもっとも重要な事項として災害史や河川史に掲載され、記憶を伝えることが多い。

ところが、札幌中心街を襲った大正2年水害は、そうした傾向とは別になっている。その要因は定かでないが、札幌創建の当時は、度々洪水氾濫を受けていたためかもしれない。

平成7年の阪神・淡路大震災は、途絶えることなく追憶の催しがくりかえされている。その阪神で、昭和13年の大水害の記憶が薄れているようだ。71年前のことで、谷

昭和13年災害と昭和42年災害の比較

被害区域 昭和13年災害と昭和42年災害の
主な被害区域の変化



昭和13年と42年の六甲山系災害比較

	昭和13年 最大24時間雨量326.8mm 最大60分間雨量 60.8mm	昭和42年 最大24時間雨量319.4mm 最大60分間雨量 75.9mm
流出土砂量	502万m ³	砂防ダム 174基 流路工 9ヶ所 崩壊工等 7ヶ所 床固工 5礎
被災家屋	150,973戸	229万m ³
死者及び 行方不明者	615人	38,305戸 92人

昭和42年は昭和13年に比べて最大60分間雨量、10分間雨量では、大きく上回っているにもかかわらず、被害は著しく減少している。

図 「表六甲河川」(兵庫県土木部河川課、平成4年3月) より

崎潤一郎の「細雪」の舞台にもなった。その際、神戸市の復興事業が内務省で実施され、神戸市の大改造が展開された。その効果は、昭和42年の神戸水害にも顕われた。

降雨量では大差はないが、時間雨量では昭和13年をうわまつた。それにもかかわらず、被害地域は、格段に少なく済んだ。

昨年夏、71年前と42年前の水害を経て改修された都賀川で、ゲリラ豪雨による川遊び中の悲劇が報じられた。トピックとしての取りあげ方、あるいは近代的防災情報の分析が様々な視点で行われた。でも、都賀川の前史、つまり僅か71年前、42年前の神戸の河川群の洪水や水害、さらにその後の改修にふれて今日の都賀川をあつかった事例はきわめて少なかった。おそらく、阪神・淡路大震災を基にすれば、都賀川は極部的だが、近代的な河川と人とのかかわりであるということなのだろう。それでも、74年前と42年前の阪神大水害は、阪神・淡路大震災の影に消されてはならない事例だろう。約30年ごとにくり返されてきた神戸の大災害は、絶えず追憶しておくべき大水害である。

少くとも、阪神・淡路大震災前の神戸市の災害とか、都市改造の話題では、阪神大水害から説き起されてきた。

そもそも、自然現象にともなう災害については、発生した地域で記憶を継承してきた。それは防災計画にあたっても同様で、他地域で発生した自然現象を計画の前提にするようになったのは、昭和30年代後半からと言って良いだろう。東京の高潮計画がその代表例で、伊勢湾台風が東京湾に襲来したとすればという計画で、隅田川の高いコンクリート堤防が造られた。

災害の継承を全国的にとらえるか、地域ごとに扱うか、議論のあるところだろう。

災害列島などと称せられる日本の国土では、全国的にとらえると、年中災害が発生するので、災害への警鐘には有効である。

その反面、地域性が乏しくなるので、記憶が薄れがちとなる。つまり、「災害」が一般化すると、緊張感に欠ける。記憶を継承するためには、災害との緊張関係が必要不可欠であろう。それだけに「災害」の一般化は不安である。「喉元過ぎれば熱さ忘れる」とか、「災害は忘れたころにやってくる」は、言い得て妙である。だからこそ、災害との緊張関係を、どのように育むかが課題となるのだろう。おそらく、全国的なとらえ方と地域的なとらえ方の双方が必要なだろう。しかし、ともすると「双方」が崩れてしまう可能性が強い。「伊勢湾台風50年」も、「双方」が欠けないことを期待したい。